第３回札幌市市有建築物のあり方検討委員会　議事録

日時　平成 25 年 9 月 17 日　午後 1 時 45 分～5 時 40 分
場所　麻生総合センター、資生館小学校

出席者：

○委員

杉岡 直人委員長、石井 吉春副委員長、小篠 隆生委員、喜多 洋子委員、
佐久間 己晴委員、笹川 貴美雄委員、寺下 麻理委員、成田 眞利子委員、
南 亜太良委員、渡辺 恵美子委員

□事務局職員

石川 敏也政策企画部長、梅田 岳政策調整課長、佐藤 学企画調整担当課長、
新井 達之調整担当係長

次第：

(1) 複合施設視察
　① 麻生総合センター（札幌市北区北 39 条西 5 丁目）
　② 資生館小学校　（札幌市中央区南 3 条西 7 丁目）
(2) 意見交換
　① 課題整理と検討の方向性について
　② 意見交換

配布資料：

・次第
・座席表
・資料１　第２回市有建築物のあり方検討委員会で出された主な意見について
・資料２　第１回検討委員会における主な議論と「札幌市まちづくり戦略ビジョン」の方向性を踏まえた課題整理
・参考資料１　他団体における公共施設マネジメントの数値目標
・参考資料２　市有建築物のあり方に関する市民アンケート

１．意見交換

（杉岡委員長）

時間の関係上、本日議論する議論する予定だった数値目標の件は次回以降にまわし、今回は本日の視察に関し、委員の皆様から意見など伺いながら進めていきたい。

（梅田政策調整課長）

委員長のご発言どおり、今回は複合施設の視察に関する感想等をお伺いしたい。なお今日の委員会には全員のご出席を頂いており、委員会が成立していることをご報告申し上げる。

配布資料を確認する。資料 1 は、前回の委員会での総論の骨子部分についての議論のなかでいただいた意見を整理したものである。資料 2 は、前回委員会で配布した資料と同様のものである。参考資料 1 は、他の自治体における公共施設マネジメントの数値目標を整理したもので、詳しくは次回の委員会で議論いただく。

なお、参考資料 2 の市民アンケートは 9 月 13 日に発送済で、10 月 4 日を回答締切とした。分析結果等は追ってこの委員会でご報告申し上げる。

（杉岡委員長）

今日の委員会で視察した施設に関し、自由にご感想などお伺いしたい。麻生総合センターは複合施設であり、かつ指定管理者制度で運営されていた。施設のあり方について、地域に繋がるまちづくりセンターと、子どもたちや高齢者が利用する施設とが合わさっている。専門職員も揃っているし、広域利用も特徴となっていると思われる。

（石井副委員長）

私自身、来年から老人福祉センターを利用できる年齢であり、今日は感慨深く見学させて頂いた。関係者が協力しながら施設運営を行っている点には好感を持てる。他方、課題の多さは承知の上、各施設の管理者を同一にして効率的な運営を検討する視点も重要ではないか。

もう 1 点。高齢者にとっての居場所作りは大切な課題だが、遊ぶことに力点を置いた居場所を（公共が）作ることには感覚的に馴染めない。高齢者が社会に対して役割を持って参加するようなあり方を考えていかなければ、今後増える団塊世代の高齢者に訴える施設にはならないと思う。

（喜多委員）

麻生総合センターは、私自身、麻生で生活しているのでよく使う施設。しかし管理が縦割りになっている点は課題。より広い面積を使いたいというニーズがある場合でも、施設を跨ぐと難しいなど、正直申し上げて使いにくい面が多い。

他方、この施設は地域との協力関係ができている。例えば児童会館の利用者に対し、（複合施設に入っている）他の施設で行うイベントへの参加を呼びかけるようなことも可能。しかし、高齢者からは施設利用上の不満を訴える声が多い。子供たちにとっては日常的

に高齢者を目にできる場所であり、良い施設。世代間交流の場がさほどあるわけではないが、日常的に目にできるだけでも、子どもの成長を促すはず。もう一歩だけうまくいくような施設配置など考えられるはずではないか。

（渡辺委員）

私の住む豊平区の老人福祉センターでも、今日の麻生総合センターと同様、高齢者の皆様がダンスや囲碁を楽しんでいる。今後は、自分だけが楽しむのではなく、地域にどう還元していくかといった視点や講座なども必要ではないか。豊平区では高齢者が講師として（地域に入り込んで）お話に行き、そこに皆様が集まってくる。ただ楽しむだけではなく地域にボランティアとして還元するといったことが必要。そのような取り組みを行う際、社会福祉協議会が相談にのってくれる。このような流れも重要。

（笹川委員）

第 1 回委員会で、喜多委員から子供たちがお年寄りに寄り添うロボットの絵を描いたとのお話を伺った。私自身も、今後、子供と高齢者が触れ合う機会が、これからますます必要になるのではと感じている。生涯教育の観点からも重要だろう。なお、麻生総合センターでは、町内会活動では地区会館以外の部屋はさほど使われていないと伺った。例えば老人福祉センター内にある和室などは、もっと町内会活動で使われれば良いと感じた。

（小篠委員）

今回の視察は施設を複合化する際のプログラム作りの観点で考えさせられる事例だった。当初と現在とでは、施設利用の実態や指定管理の状況が大きく変わっており、陳腐化することもある。麻生総合センターでは茶室がさほど利用されておらず、談話室となっていた。建築当初の使われ方とは違ってきており、このようなことは起こり得ること。どのように克服していくかという点はまさに市有建築物のあり方を検討する上で重要。

もう 1 つは児童会館。後からの施策によって複合化施設に入ってきた印象を受けた。施設管理側の要請により子供たちの利用に制限がかかっているのではないか。「多世代交流」というワードは良いが、施設の状況を踏まえ、利用形態を柔軟に設定していくところまで考えていかねば、より良い施設利用に繋がっていかない。子どもたちのためのセンターという位置づけとしては良い。安全面にも配慮され、施設内に専門家もいるが、一般・地域の大人たちが入り込んで行きにくい施設になっているのでは。

（杉岡委員長）

変化する多様な市民ニーズを踏まえ、使い勝手が良い公共施設を提供していくことは重要。他方、市民全てのニーズを満たすことは不可能。ある年齢層にとっては使い易い施設でも、それより高い年齢層の利用には向いていない施設もあり得る。高齢者同士のふれあいもスペース上難しい。

施設を複合化することで、それぞれのニーズが少しずつ押し込められてしまって、利

用者の皆が少しずつ不満を感じてしまうということも生じているように思う。「多世代交流」という実をとるためには、妥協点をどこに見出すべきかという点も重要ではないかと感じた。

（杉岡委員長）

では、近代的な施設再編成を行った事例として、資生館小学校についての感想を伺いたい。

（南委員）

複式学級の小学校で育った私としては、オープン教室等のコンセプトに共感を覚えた。体育館の広さなども近代的。半地下の体育館など初めて目にした。

（成田委員）

立派な作りの小学校。他方、近隣の地域の方々が足を運べるような小学校にはなれていないと伺った。開設から 10 年経った現状が、これから 10 年後も変わっていないとするならば残念だと思う。地域づくりの中で学校のあり方を打ち出していけると良い。

（寺下委員）

一般にミニ児童会館は小学校の空き教室を活用して設置する。資生館小学校はミニ児童会館ありきで作られているはず。通常のミニ児童会館では、放課後に体育館など学校施設を使えないと思うが、この小学校では体育館や図書館を使うことができる。これらは運営協議会効果なのだろうか。資生館小学校のミニ児童会館と他校のミニ児童会館との間でどのような仕組みの違いがあるのかという点は興味深い。

そもそも学校は地域にとって敷居が高い場所。首都圏の先進事例で、地域との交流が行われている小学校と伺ったとしても、地域にいる名人がやって来て〇〇教室を行う程度。資生館小学校のように頑丈な警備を行っている小学校では、そもそも地域との交流を推進することが難しいのではないか。繁華街立地という土地柄もあるのかもしれないが…。子供たちが地域に出て行く発想の方が交流に至りやすいかもしれない。

老人福祉センターに関する石井先生の意見には強く同意する。あのような施設にいらっしゃる高齢者には社会的な役割をもって活躍してほしい。今後は自分たちで何かを設計して推進していきたいという考えの方々が増えていくのではないか。規制された範囲の公共施設に来てくださいというのでは成り立たなくなる。

（佐久間委員）

資生館小学校はすばらしい施設。このような方法もあるのだと改めて勉強になった。セキュリティもしっかりしている。他方、この施設の中を高齢者がふらふら歩く光景は想像がつかない。仮に（利用者の）幅を広げたとしても、一体感を持ち続けられるようなキーワード、地域に開く施設になった場合のキーワードは思いつかない。

麻生総合センターは硬直的な組織運営がなされている印象だった。3 人の館長がいて、

更に指定管理者まで存在するならば柔軟な組織運営は難しい。ソフト面・ハード面の両面での柔軟さをもつ必要がある。地域の人が役割を持ち、関わっていくことも重要である。

（杉岡委員長）

古くに作った施設を基に、増築的な発想で複合化を進めてきた麻生総合センター。これに対し、当初から複合化前提で組み立てた資生館小学校。資生館は全市的なサービスを中核に持っているので、地域内の施設というよりは札幌市全体での子ども支援のモデル的な役割を果たしている点が売りの施設だと感じた。

施設の複合化には、そこに存する人たちを地域で包み込むという視点が必要。資生館小学校では、子どもにどのような機会を提供するかという視点がまだ少ないのでは。小学校で子どもたちを囲い込んでいるので、極めて部分的に地域と繋がっているような印象を受ける。このエリアには歴史が古い商店もあり、地域の方々に様々な事柄を教えて頂く上ですばらしい環境をもっている。歴史を学んだ子どもたちが成長できるとすれば素晴らしい。地域資源の教育への関わらせ方が、まだうまく熟していない印象。

（石井副委員長）

誰がどのようにコミュニティ施設を運営するのか。究極の姿は自治体ではなくコミュニティの皆様が施設運営を担うべき。仮にコミュニティで施設運営を担えないとするならば、それは要らない施設ということになる。そのような営みを通じ、様々な社会性が出てくる。前向きの目標設定を行いながらこの種の施設を再構築していかなければならないのでは。

公共施設が存在すれば人は集まってくるだろう。しかし、このことをもって施設の必要性は生まれてこない。価値観をきちんと考えていかねばならないはずだ。

（杉岡委員長）

数値目標の捉え方については、どのような要素を選択・評価していくべきか。次回以降も議論していきたい。次回以降、考え方について整理していければと思う。

次回委員会は 10 月 22 日 9:30 からで予定されている。宜しくお願い致したい。

２．連絡事項

（梅田政策調整課長）特になし。

以　　上